

論文

牧畜生業形態の変化とオボー祭祀の主宰組織の再形成

— 内モンゴルのオトク地域の事例を中心に —

白 莉 莉

BAI Lili

一、はじめに

中国で1950年代に推進された社会主義的集団化により、内モンゴルの牧畜地域における牧畜業の人民公社化が実行されたが、その後、この体制は、1983年の「草畜双承包」（牧草地と家畜の請負制）の導入により解体されることとなった。この時期から牧畜地域では徐々に各世帯の利用できる放牧範囲を鉄線で囲むような牧場の分配が行われ、したがって定住を基盤とした牧畜生業が営まれるようになり、2000年前後になって本格的に定着してくる。一方、1960年代の文化大革命により、牧畜地域では伝統的な祭祀習俗が迷信であるとして全面的に廃止されることになったが、またその後の新型牧畜生業形態の定着とそれに伴う生活様式の変化にしたがって、近年では牧畜地域の伝統的な民俗文化は多様な変化を見せながら再生しつつある。

本稿では、内モンゴルの典型的な牧畜地域であり続けてきたオトク地域の牧畜村落において営まれている牧畜生業の実態を取り上げる。さらに、牧草地の分配による定住型の牧畜生業形態の定着に伴い、牧畜村落の地域集団で営まれている牧畜生業と密接に関わる儀礼活動であるオボー祭祀にどのような影響をもたらしたのか、特に近年中国の伝統文化復興の波に追われて勢いよく復活しつつあるオボー祭祀活動の主宰組織にどのような変化があり、どのような特徴で組み替えられるようになったのかについて検討する。

二、先行研究

近年、内モンゴルの各地において伝統文化の再活性化を目指して、行政府側が巨資を投じ伝統的な祭祀活動を復活させる動きが見られる。牧畜地域においては毎年夏の時期に行われるオボー祭祀は、地方行政府に伝統文化復活の誘導対象と見なされ、「オボー文化節」などの催し物まで開催し、民族の特色ある伝統文化を通じて地域の知名度を高め、観光業を発展させることに注力している。

したがって、モンゴル族の伝統文化の研究に関心を注いできた研究者たちは、過去に例を見ない勢いで復活しつつあるオボー祭祀活動により注目し、多様な研究視点で検討し、一定の成果を挙げている。オルトナスト（2006）は、内モンゴルの中部に位置するシリングル盟の典型的な牧畜地域であるウジムチン地域を研究対象地として選定し、近年復活したオボーの造営、構造、類型、祭祀儀礼、オボーの機能などについて綿密な実地調査を行っている。その研究について、彼は自ら、「一つの地域

におけるオボ、或いは一基のオボの構造（配列、荘厳具など）、祭祀に関する詳細なデータに基づいた研究はほとんど見当たらない」と自己評価を加えている。オルトナストの研究成果は、1980年代の初頭においてオボ文化が復活した後に、学問的な視点から一つの地域を取り上げ、オボと関わるあらゆる要素に対して分析を加えており、これまでの研究と比べてより広い視点でオボの祭祀過程における諸儀礼について検討している点で、近年のオボ研究を新しい段階に導いたといえよう。

ナランビリゲ（2010）は、内モンゴルのオールドス市オトク前旗を対象として、オボ祭祀に見る民族の帰属意識、オボ文化の持続とグローバリゼーションの過程におけるオボ信仰について検討している。特に、近年になって伝統文化の産業化が進行する中で、伝統文化の復活が如何に観光資源化に活用されているのかという点に注目している。この問題に関しては、非常に豊富な図像資料が活用されており、非常に興味深い。

上記の先行研究は、主に2000年以降の時代的な特徴を捉え、地方政府が主導するオボ祭祀の復活に注目し、特にそのなかの儀礼研究と観光化問題を集中的にあつかっている点で共通性が見られる。これらの研究はオボ祭祀活動を牧畜儀礼の一環として位置付けながら、時代的な特徴に富み、公的色彩を帯びた規模の大きなオボ祭祀の儀礼研究に焦点を当て、それを以てオボ祭祀の伝承にアプローチしようとしてきた。そこで今日、牧畜生業形態に多様な変化が起きつつあるにもかかわらず、それがオボ祭祀習俗に如何なる影響をもたらしているか、特に今までオボ祭祀習俗の伝承を担ってきた地域集団、主宰組織の構成などについての研究注目がまだ見られないということが現状である。本稿は、今までのオボ祭祀習俗の研究成果を踏まえた上で、オトク地域においては牧畜生業を営む牧畜村落の生業形態、生活環境を前提に、地域集団で継承してきたオボ祭祀活動の主宰組織の新たな形成特徴について検討を試みる。

三、オトク地域の牧畜生業形態について

1、オトク地域の概況

オトク地域⁽¹⁾は海拔1000～1300mのオールドス高原西部に位置し、南は陝西省と、西南の方角は寧夏回族自治区、東はウーシン旗と隣接する地域である。年平均気温は6.4℃であり、年平均降水量は270mmである北温帯乾燥と半乾燥草原気候の地域である。人口は約20万人であり、その内、モンゴル族は約30%を占めている。これは、モンゴル族が13%しか占めない内モンゴル全体の割合と比較して、かなり高い割合の地域であるといえる。オトク地域の土地面積は約3.3万km²で、そのうち天然牧草地在が約80%を占め、典型的な牧畜業を主な生業としている地域である（図1）。



図1 オトク地域の位置

1983年から人民公社が解体され、牧畜地

域においても生産請負制度が展開したことで、家畜の飼養は世帯を単位に負担するようになり、各世帯の人数と家畜の頭数によって牧場を分配し、世帯単位で管理するようになった。そのため、現在のオトク地域では牧畜民各世帯が所有する牧場の面積が1,000 畝～10,000 畝の間とまちまちである [オトク旗誌編纂委員会 2004；オトク前旗誌編委会 1995]。

オトク地域では、オルドス市の天然牧草地の面積が最も広く、ここは主に牧畜を生業の中心とする地域である。地理的には南から北の方に延び、広い土地に渡って各地方の自然や気候、さらに資源もそれぞれ異なるものである。オトク地域は広い天然牧畜地を有する一方、豊富な地下資源を所有し、近年その開発がどんどん進められている。それに、土地が広く人口密度が低いという特徴もあり、地下資源の開発をもとに、大規模な近代的な企業経済の導入が推し進められている。したがって、近年の経済発展計画の一環として政府は、地方の自然条件と生業の特徴などに合わせて発展計画を立てることに専念し、その結果、オトク地域において⁽²⁾ 牧畜経済区域、⁽³⁾ 農耕経済区域、⁽⁴⁾ 工業経済区域と観光業の開発を目指す生態保護区など数種類の経済区域が誕生した。これは、近年の現代化の波に乗って、典型的な牧畜地域は徐々にいくつかの経済産業区を含んだ地域へと変化しつつある現状を示している。本稿の課題と関わる視点から、以下で現在オトク地域において牧畜経済区と呼ばれる牧畜地域の自然環境と生業形態について言及しておきたい。

オトク地域の牧畜区域は、地形は基本的に丘陵地や山地であり、地面の土は柔らかく、所々に砂丘と草原が混在しており、植被は比較的弱い地域である。この地域は中国では「砂漠」と表現されるのだが、その不毛の地というイメージに異議を持つモンゴル人側はこの草原を「バラル」、つまり砂漠性草原を意味することばで呼んでいる [楊 2001]。このような砂漠性草原には、実際には無数の種類の植物が自生しており、人間よりも高い灌木から地衣類まで植生は豊かである。所々に砂丘があり、砂丘と砂丘の間には密生した植物群がある。

この砂漠性草原は、遊牧を営んでいた時代において、牧畜民たちにとっては厳冬の季節に家畜を保護しやすく冬を暖かく過ごせる草原として利用され親しまれてきた。砂漠性草原には水溜りや尻無し河（大水の時だけ水が流れ、他の河のように海などに流れ込まない河のこと）も多かった。特に風雨の多い年には、凹んでいる地面において水溜りが多数できた。土地は広く、人口密度が低かったため遊牧生活には適する地域であった。また、20 世紀の半ばまで地方の人々はまだキツネや鹿などの動物を狩猟できるなど野生動物にも恵まれていた土地であったという。現在でも、野外にはウサギが盛んに走りまわっており、それは、時には牧畜民の食卓にのぼることもある。

オトク地域において人民公社が解体するに伴い、1984～85 年から牧草地を世帯単位で管理する請負制度が実施され、牧場の請負運動が始まり、地方によって人口密度と牧草地の面積が異なるため、牧草地分配は各地方の実態に応じて世帯の人数を基準に分配したという。現在基本的に牧畜民各世帯が1,000～10,000 畝の牧草地を利用することになっており、牧場が制限されている。つまり、限られた牧場における過剰放牧を防ぐために、近年では、家畜の数を制限する制度が実施された。この制度は、約5 畝の面積の牧草地に家畜を一頭というふう決められた。そのため、オトク前旗の昂素鎮の場合、普通の牧畜民は平均約2,000 畝の牧場を所有し、その中でおよそ400 頭の家畜を飼うことが出来ている。

モンゴルの牧畜においては、元々は羊、ヤギ、牛、ラクダ、馬など所謂草原の五畜を放牧してき

た。しかし、牧草地の管理私有化により、このような家畜の移動範囲が制限された牧場は、多種多様な家畜の群れを負担できなくなり、その結果典型的な牧畜地域においても馬やラクダ、牛など大型の家畜はその数が減少しつつある。現在、普通の牧畜民の家庭は基本的に羊やヤギの群れの放牧に頼り、数頭の牛を飼っている状況である。また、急速な機械化により、内モンゴルの草原においては、馬はもはや移動手段としての機能が失われ、一時草原の舞台から引き上げることになった。しかし近年では、伝統的な祭祀活動の復興に伴って、一部の人たちは再び馬の飼育に専念し、様々な所を回って競馬活動に参加している。そしてこのような競馬活動に依然として大勢の人々が集まりそれを楽しむのである。現在、牧畜民の家の壁に馬や馬の鞍などの飾りを掛けてある場面がよく見られ、彼らにとってそれは馬と民族の歴史を懐かしむ存在となっているのであろう。

近年西部大開発の一環として、経済的に後れている地域を優先する政策が実施され、オルドス市の牧畜地域では、ここ数年、家畜税が免除されるようになった。これまで、牧畜民たちが政府に納付していた税金には、牧業税、屠殺税、特産税、農業税、農業付加税、車船使用税、地方教育付加税など多種多様な税金が含まれ、税金の他に、地元の政府に管理費、教育付加税、優遇費、民工建勤費、民兵訓練費、計画生育（出産）費などを納入しなければならなかったという [楊 2004]。その後、2001年から諸税免除政策が実施され、人々の生活の負担も大いに減少したという。

以下でオトク地域の典型的な牧畜村落であるモガイト・ガチャを事例に、近年の牧畜生業形態の実態を分析してみる。

2、牧畜村落のモガイト・ガチャ

モガイト・ガチャは、昔から牧畜生業を営んできた村であり、牧畜地域が遊牧型の生業形態から定住型の生業形態へと転換する過程で形成された村である。そこは、他地域の村と同様に村という行政組織の名称を名乗っているが、村落のあり方としては、牧畜地域の特徴を具えた村と見ることができる。

モガイト・ガチャは、現在、オトク前旗の旗政府所在地のオラジャチ鎮から約 72 km 離れたナンソ（昂素）鎮に所属する牧畜村落である（図 2）。村の面積は 37 万畝で、実際に利用可能な面積は 26 万畝である。村には 6 個の牧業社が設けられており、168 戸の世帯、578 人の人口を有している。そのうち、モンゴル族は 62.5% 近くを占めており、モンゴル族を主体とした村である。1980 年代から始まった牧場の生産請負制度により、現在モガイト・ガチャでは牧畜民一世帯がおおよそ 1,000~6,000 畝の牧場を所有しており、各世帯の牧場はそれぞれ鉄線で囲まれている。牧畜民たち

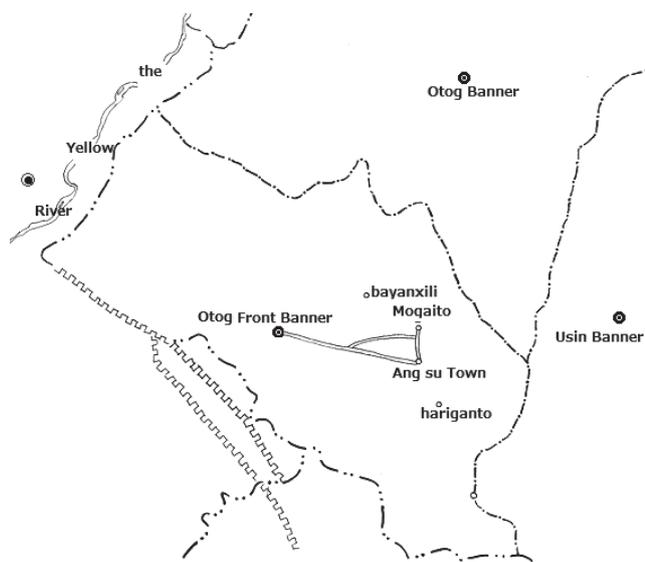


図 2 モガイト・ガチャ及び本稿で登場する牧畜村落の位置



写真1 牧場に囲まれる牧畜民の家

はこの鉄線で囲まれた牧場の中に固定式の家を建てて暮らしている（写真1）。

モガイト・ガチャの牧畜民たちは主に羊やヤギなどの小型家畜の群れの放牧に頼って生活を営んでいる。各世帯の牧場は全体的に有刺鉄線で囲まれており、家畜はその中で放牧されている。

(1) 「エベソン・フレー（草畑、草庫侖）」の誕生とその役割

牧畜民各世帯の牧場の中には、一部の牧草地を鉄線や灌木の枝で囲んだ場所がある。ここは普段は家畜の立ち入りを禁止し、その中の植物の成長を確保している。このように保護された小さな牧草地を、「エベソン・フレー（草畑）」という。草畑では、そのまま植物を生やして、秋になると植物を収穫し、冬と春の間の家畜の餌にする。草畑の中で自然に生える植物以外にも、数十畝のトゥモロコシの畑などを作り、収穫物を家畜の餌とする。近年、政府は牧畜民たちにトゥモロコシの畑以外にも少量の野菜畑を作り、日頃の野菜を自給することを提唱している（図3）。

普段、家畜の群れは草畑以外の牧場においては自由に放牧されるが、この牧場においても自然な植生を保つために、草が生える春の季節、つまり4月から6月にかけての時期が強制的に「休牧期」として定められている。この時期は家畜の群れの放牧が禁止され、家畜は小屋に閉じ込められ、餌での飼育が行われる。この季節の餌は、前年度に得られた草畑の植物やトゥモロコシの収穫などによって確保されるのである。⁽⁵⁾

牧畜生産暦では、秋の9月と10月は家畜の交尾期であり、

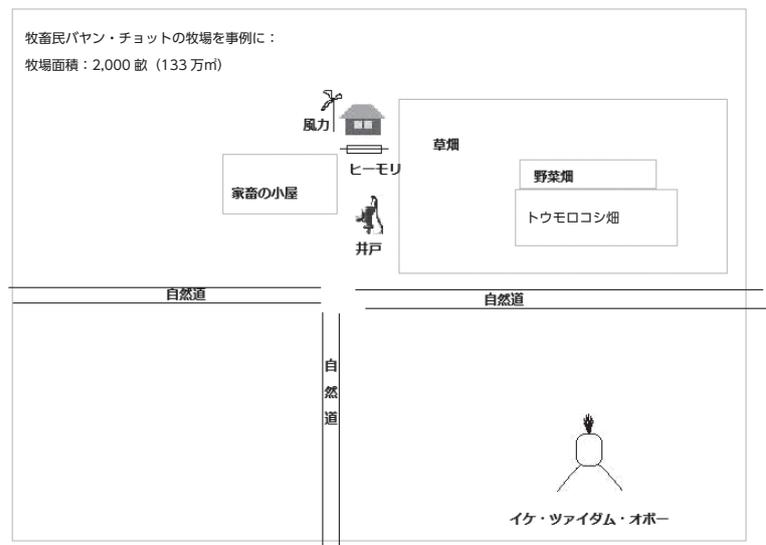


図3 モガイト・ガチャの牧畜民バヤン・チョットの牧場を事例に

牧畜民たちは草畑を収穫後、胚胎している家畜や体の弱い家畜を草畑に放牧し、無事に越冬できるように努める。2月から4月にかけては、家畜の出産シーズンを迎える。仔畜が生まれてくる春は、牧畜民たちにとって1年の収穫を確保する最も重要な時期でもあり、牧畜生産の年間サイクルの中では最も大切な時期となる。この季節、牧畜民たちは昼夜を通して家畜の世話をし、生まれてくる仔畜の生存率を確保しようとするのである⁽⁶⁾。



写真2 飛行機で植えられた灌木性植物

近年のモガイト・ガチャにおいては、冬から春にかけての家畜の餌を確保するために、牧場の植生が芳しくない世帯は、政府の援助を申し込むか、自ら投資して草畑で機械を使ってハルガナやトルログと呼ばれる灌木性植物⁽⁷⁾を植える様子もたびたび見られるようになった（写真2）。

(2) 「退牧還草」政策の実施

i 「舎内飼育」への奨励

近年、モガイト・ガチャにおいては、村の生態環境の衰弱と牧畜民の収入状況の低い現状に基づき、「生態を回復し、人口を転移し、舎内飼育を支持する」政策を確立している。村の党支部は積極的に国家の投資プロジェクトを獲得し、16万畝の「退牧還草」のプロジェクトを実施し、64戸、234人に影響を及ぼしたという。この「退牧還草」項目においては、灌木性植物を人工的に植えることによって牧場の改良を目指す一方、飼料基地の改善と、舎内飼育を進行させ、生態環境の回復を促進している（写真3、4）。このような舎内飼育は、国の投資支援でレンガ造りの家畜の小屋を作ることを薦められ、加工された飼料によって肉やウールなどの生産量はより改良された家畜の飼育を奨励することである。このような家畜の小屋は一方で厳冬時期に家畜の無事越冬を確保できるため、牧畜民の憧れの設備である。



写真3 国の支援で作られた家畜の小屋



写真4 舎内飼育実施中の牧畜民世帯

ii 禁牧政策の実施

近年、牧畜経済区域の持続可能な発展戦略（中国語で「可持続発展」と表現している）の一環として、牧畜民の牧草地における植被率の状態により、家畜の放牧を適当な数に制限する禁牧政策が実施されるようになった。それは、基本的に季節性禁牧と5年制禁牧という2つの政策である。その中でほとんどの世帯の牧草地は季節性禁牧対象となり、春の草が生える時期に家畜を小屋に閉じ込めて飼料で飼育し、草がある程度成長すると各世帯の牧場の中での自由放牧が許可される。

一方、植生は極めて弱く、砂漠化が深刻とされた牧草地においては、5年制禁牧制度が実施される。これは、5年単位として対象牧場において家畜の放牧が完全に禁止され、牧畜民は住処に住むことは出来るが、家畜の放牧が許可されないという政策である。2012年は、オトク地域にこのような禁牧政策が実施されるようになって10年目となり、つまり5年制禁牧の二期目の最終年である。5年制禁牧の対象となった世帯は、普段住処に住むことは許可されるが、原則上家畜の飼養は一切許されていない。牧畜民たちによると、禁牧となったこの10年間では、牧場の砂丘の面積は確実に抑えられ、以前牧場に生えていた毒草もほとんど消えているという。ただ、2013年からさらに5年間禁牧が続くと、今後の放牧生活の維持が不安になるという（写真5、6）。



写真5 10年間禁牧となっている牧場



写真6 5年制禁牧対象となった牧畜民世帯

このような禁牧政策の最初の段階において、禁牧対象となった牧畜民の世帯は毎年政府から一定の生活費を受給していたため、家畜の放牧を放棄し、近くの町で単純な商売を営むようになった人たちもいるが、出稼ぎに向かない年配の牧畜民たちは近隣や親戚の牧場を借りて小規模な家畜の放牧を維持してきた。モガイト・ガチャにおいて、この政策により青年労働者は出稼ぎで収入を保持するためにすでに120人は転居しているという。

(3) 牧畜村落の出稼ぎ生活

禁牧政策の対象となって出稼ぎに出た牧畜民と比べて、禁牧対象となっていない牧畜民の世帯も家計を助けるために放牧を行いながら臨時に出稼ぎに出ているケースが多い。過剰放牧を防止するために、強制的に家畜の数が制限されたため、現在モガイト・ガチャにおいて多くの牧畜民の世帯には、2人ぐらいの労働力が家に残って日常的な生業を支え、残りは地方の開発プロジェクトによる道路の建設や地下資源開発などの各種の工事現場で働くようになっている。家庭に残り、実際に家畜の放

牧を維持しているのは、基本的に年寄りの夫婦2人となり、余剰な若い労働力は不安定な出稼ぎに従事するようになっている。そのため、家族全員が実家に集まるのは、お正月の時期や夏のお祭りの時期だけという状況になっている。

牧畜を営んでいると、それに関わる信仰習俗は途絶えないものである。牧畜生産暦においては、1年の季節ごとにその時期にする仕事が決まっている。基本的に、秋の時期は草がよく生え、栄養をたっぷり吸収した家畜たちが交配する季節である。家畜の胚胎期は羊やヤギの場合5ヶ月の期間があり、冬から春にかけての季節は出産期である。そして、春が終わり夏を迎えるころは、家畜の出産期を終えて牧畜民たちの収穫を祝う季節がやってくる。夏の季節において、牧畜地域では様々な祭祀活動やお祭りなどが盛んに行われる。オポー祭祀は、牧畜地域においてまさにこの収穫の季節に行われる祭祀活動であり、この祭祀活動をとおして牧畜民たちは過去1年の収穫を土地の神々に感謝し、この年の風雨の順調と牧草地の繁茂を祈願し、家畜の順調な生育を祈るものである。一方、普段人々の行き来の少ない草原において、オポー祭祀はまた遠近の牧畜民同士が集まり交流する場所でもあり、夏の間のモンゴルにおいて欠かせない活動であるといっても過言ではない。

四、オポー祭祀の主宰組織の再形成

オポーとは、牧畜民が自分たちの暮らすそれぞれの地域において、土地の神の依り代として神聖視される崇高な山岳や河といった自然景観が荘厳な場所を選定し、そこに石や土、灌木などを積み重ねた造営物のことを指している。牧畜民は毎年定期的に、オポーに対して祭祀を行っている。元々オポーは、万物に神霊が付いているというモンゴル人の自然観から発生したものである。そのため、オポーの造営に際しては主に自然の石を積み重ねたもの、または灌木を束ねたものが用いられてきたが、近年では、レンガやセメントなど現代的な建築の材料を使用し、豪華に改築される例も多く見られるようになった（写真7、8）。



写真7 ボルハン・オポー



写真8 シュルヘイ・オポー

オポー祭祀は各土地のコミュニティの繁栄、家畜の繁殖などを祈願する宗教的行事としての性格を持っており、牧畜生業において収穫の季節である夏から秋の時期に行われる。祭祀の際に、牧畜民は

羊やヤギ、牛馬などの家畜、あるいはその肉、乳製品などを供え、五畜の豊饒、無病息災などを祈願する。また、オボ-祭祀においては、競馬やモンゴル相撲など伝統的な技能も奉納されることがほとんどである。

伝統的な遊牧社会において、オボ-祭祀は単に神々を祭る場所としての意味を持つだけでなく、遊牧社会の政治、社会、軍事などと密接に関わる集会としての役割も担ってきた。オボ-祭祀の場において、地域共同体の生業と関わって発生した揉め事について協議し、共同体の構成員同士の社会関係を調整する公的な行事が行われる。また、オボ-祭祀に付随する競馬を通して、家畜を調教するための牧畜民の知恵が披露され、各地から品質のよい馬を選抜し、それを軍事的に使用することも考えられてきた。オボ-祭祀に伴う相撲取りはモンゴルの力士たちが体を鍛えた結果を披露する機会でもあり、厳しい自然環境や社会環境と闘うモンゴルの英雄を輩出する舞台ともなる。

オボ-祭祀は、牧畜社会においては自然と人と家畜とが一体化した固有の祭祀習俗であり続けてきた。近年、定住型の牧畜生産が定着するにしたがって、オボ-を囲む地域集団の構成は複雑化し、牧畜村落におけるオボ-祭祀を継承してきた主宰組織の構成は伝統を引き継ぎながら様々な変遷を辿っている。

伝統的な遊牧社会においては、オボ-を祭る集団は自由に形成され、主宰組織には固定的なメンバーは存在しない。オボ-の主宰役はオボ-を祭る世帯同士で自由に交替で行われていた。また、オボ-を祭る集団の規模により、主宰役の人数が決まっていた。以下で事例分析をしながら現在の牧畜村落に行われているオボ-祭祀の主宰組織の特徴を見てみる。

1、モガイト・ガチャのイケ・ツァイダム・オボ-の事例

モガイト・ガチャには現在、村の中心にあるツァイダム丘の頂に位置するイケ・ツァイダム・オボ-と、村の南にあるフテリン湖の畔に位置するフテリン・オボ-という2基のオボ-が存在する。牧場の生産請負制度実施により、イケ・ツァイダム・オボ-は現在、牧畜民のバヤン・チョット氏の牧場に所属しており、フテリン・オボ-は現在、ゾーン・ナムル氏の牧場の敷地内にある。

現在、イケ・ツァイダム・オボ-は現在毎年の旧暦6月3日に定期的にオボ-祭祀が行われているが、基本的にはモガイト・ガチャの牧畜民を中心に祭祀活動が行われている。近年、イケ・ツァイダム・オボ-は、同村で祭られてきたハプト・ハサルハプト・ハサルの神霊を迎えて、同時に祭祀活動を行うようになったことで、イケ・ツァイダム・オボ-が持つ地方での影響力が拡大し、毎年の祭祀の日にはモガイト・ガチャ周辺の牧畜民たちも集まってくる。

イケ・ツァイダム・オボ-の場合、景観的には、オボ-を中心に、東南、西南、西北、北の方角に4~5 km 離れた所に、それぞれラシニマ（R氏）の長男のノルブ（R.N氏）の家、二男のシラホ（R.S氏）の家、三男のセワン（R.C氏）の



図4 イケ・ツァイダム・オボ-を囲む兄弟4人の世帯

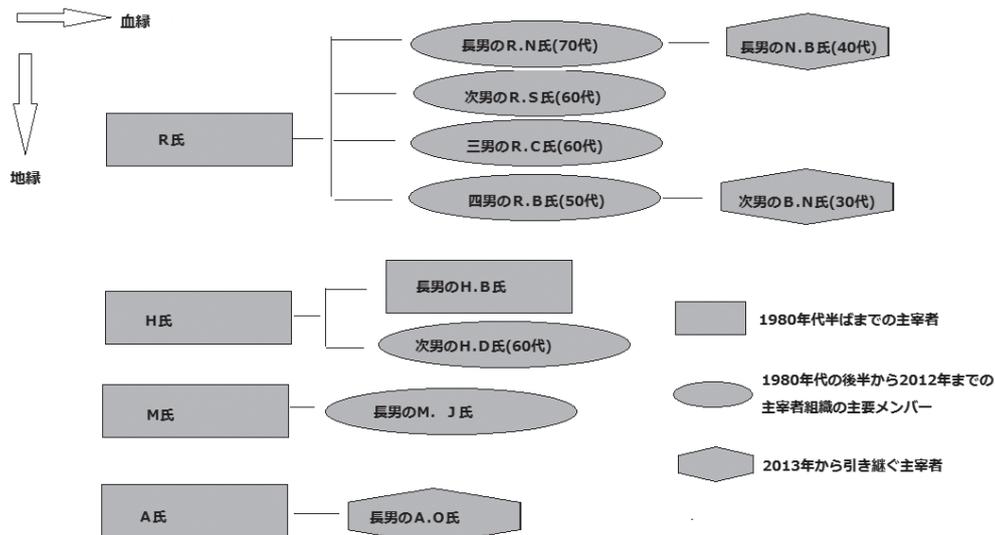


図5 イケ・ツァイダム・オボの主宰組織の構成図

家、四男のバヤン・チョット（R.B氏）の家が建ち、オボは4人の兄弟の家に囲まれている状況である（図4）。長男のノルブの話によると、前の三世代からこの地域に住み、家族は昔からイケ・ツァイダム・オボ祭祀の主宰を担当してきた。

イケ・ツァイダム・オボは1980年代の半ばまで、オボを囲んで暮らしていたモガイト・ガチャの牧畜民のラシニマと近くの牧畜民世帯がオボの主宰を担当していたという。そこまでの主宰職は主にラシニマ一家が担当していたのだが、モガイト・ガチャが自然村として形成するころからずっとオボの近くに暮らしてきた他の数軒の世帯も加わっていたという（図5）。その後、1986年からラシニマらはオボの主宰職を彼の長男のノルブ、そしてオボの近くに住んでいるジラントッタホ（M.J氏）など元主宰組織の次の世代に譲り、ノルブは主宰組織の主要担当者となった（写真9）。この時期に主宰職を受け継いだノルブとジラントッタホは、子供の頃からモンゴル語とチベット語を勉強した経歴を持ち、当時地方では文字の読み書きができる文人たちである。特にノルブは、1950年代に地方の小学校の教師を務めたことがあったのだが、文化大革命で「富牧」の後裔であるとして教師の資格を失ったという。2人の主宰者はいずれも、先祖代々からこの地域に暮らしてきた人たちであり、モガイト・ガチャの形成期に関わっていた世帯の子孫である。

1988年にイケ・ツァイダム・オボは新しい祭祀場を建立し、オボ祭祀の規模の拡大化や新しい祭祀場への管理職の増加などが考えられ、オボ祭祀の主宰組織はノルブの3人の兄弟と1人の漢民族を加えて、計7人のグループとなった。つまり、現在のオボの主宰者グループは、ラシニマの4人の息子と、先祖代々からこの土地で暮らしてきたというジラントッタホ、ダルマ（H.D氏）の2人、地方政府の要請を受けて「民族分裂主義」を避けるために加えた漢民族の1人によって構成さ



写真9 イケ・ツァイダム・オボと主宰者のノルブ氏

れている。

また 2013 年は、文化大革命後のオポーの復活から 30 周年にあたり、それをきっかけにオポーの主宰者グループは次の世代の新しいメンバーに交替することになった。新しい構成員は、ラシニマー族からノルブの長男のビリゲト (N.B 氏、40 代)、バヤン・チョットの次男のナソンバト (B.N 氏、30 代) に、ラシニマの世代に父親がオポー祭祀に関わっていた A 氏の息子にあたる元モガイト・ガチャの書記の A.O 氏が加わり、3 人の主要メンバーからなる新しい主宰組織が誕生した。

要するに、1980 年代から現在まで、イケ・ツァイダム・オポーは 3 代の主宰者組織の交替を行うことになるが、主宰者組織は、最初のオポーの近くに遊牧していた地縁集団のメンバーから、現在のオポーを囲んで定住している血縁集団が主体メンバーを成すようになってきていることがうかがえる。

2、フテリン・オポーの主宰組織

フテリン・オポーは、モガイト・ガチャの南に位置するフテリン湖に囲まれた高さ 1,344 m の丘の上にある。その北側には規模の大きいフテリン湖があり、西側に湖の分湖がある。フテリン・オポー祭祀は、毎年旧暦の 5 月 23 日に行われている。フテリン・オポーは地理的には、モガイト・ガチャの南境に位置し、毎年モガイト・ガチャの牧畜民たちと同村の南に隣接しているバヤンオソ村の牧畜民たちによって祭られている。現在、オポーの主宰者は 4 人いて、そのうち 2 人はモガイト・ガチャ出身、2 人はバヤンオス・ガチャの出身者であり、4 人ともオポーを囲むようにして近くに住んでいる牧畜民たちであるという。

主宰組織のうち、ゾーン・ナムル (40 代) は、主宰者の地位を父親から受け継いだという。現在、オポーは彼の牧場の敷地内に置かれており、彼がオポーの主宰を担当して 10 数年になるという。1980 年代のオポーの復活後から 2000 年までゾーン・ナムル氏の父親 (80 代) がオポーの主宰役を担当してきた。2000 年から 2008 年まで、オポーを囲んで暮らしていたゾーン・ナムル氏の兄弟 3 人がオポー祭祀の主宰役を引き継いだという。その後、1 人の兄弟は、牧場が禁牧となったため、村を出て親戚の牧場を借りて放牧することになり、普段はモガイト・ガチャに住むことはほとんどなくなった。もう 1 人の兄弟は、町に引っ越しし、都会の医療事情などを考えて、年寄りの父親は町に暮らす兄弟の家に住むようになったという。

そのため、2008 年からゾーン・ナムル氏と同じように前の世代から、オポーの周辺に暮らしてきたモガイト・ガチャの牧畜民 1 人とバヤンオソ・ガチャの牧畜民 2 人がフテリン・オポー祭祀の主宰組織に加わって現在の 4 人の主宰組織を形成している (写真 10)。他の 3 人は、このオポーを囲むように牧場を持ち、そこで暮らす世帯で、いずれもオポーの主宰を担当して 4~5 年目になるという。彼らは元の主宰者から譲ってもらったと言い、主宰者の地位を特に前の世代から受け継いだということはない。



写真 10 フテリン・オポーと 2 人の主宰者

フテリン・オボアの4人の主宰者は皆、同じぐらいの年齢の人たちであり、イケ・ツァイダム・オボアとは対照的に、若年層を中心とした主宰者グループである。オボア祭祀も、一般的なノトゥク・オボア祭祀と似通った雰囲気を持ち、モガイト・ガチャとバヤンオス・ガチャの牧畜民たちによって祭られている。

現在イケ・ツァイダム・オボアの主宰者を務めるジラン・トッタホは、子供の頃にフテリン湖の東北の畔に住んでいたことがあり、当時は、一家でフテリン・オボアを祭っていたという。「イケ・ツァイダム・オボアの近くに移ってから、フテリン・オボア祭祀に余り参加できなくなった。何年前に、フテリン・オボアの主宰者となることを頼まれたが、2つのオボアの主宰を兼職することは大変だと思って断った」という。イケ・ツァイダム・オボアのもう1人の主宰者、バヤン・チョットによると、彼らもかつてはフテリン・オボア祭祀に参加していたという。彼によれば、「父親のラシニマが健在の時に、フテリン・オボアも祭っていたため、我々は父親が亡くなってからしばらくフテリン・オボアも祭っていた。数年前に、フテリン・オボアにハダクを捧げて、今後はフテリン・オボアを祭らないという意志を伝えて、オボアと別れの儀式を行ったのだ」という。

上述したように、現在イケ・ツァイダム・オボアは、ハサルゆかりの神霊信仰と習合した後、その祭祀活動が地方において持つ影響力が以前よりも高まり、参拝者の規模も拡大され、地元の公的機関の関心を集めるようになってきている。主宰者たちの管理により、オボア祭祀の収支などは怠りなく整理され、祭祀場の施設の改善なども積極的行われている。一方、フテリン・オボアの場合は、オボア祭祀は従来のやり方で行われ、祭祀当日に得られた布施もそのまま当日の費用として用いているようで、祭祀場の状況もここ数年ずっと元のままで特に改善されたことはない。そのため、イケ・ツァイダム・オボアの年輩の主宰者たちは、フテリン・オボア側の若年層の主宰者たちについて、オボア祭祀の布施などを節約して祭祀場に投資するべきだと批判する気持ちを抱いている。近年、観光業の開発を進めるための行政側の提唱によって、地方における伝統文化の復活や文化施設の修築と改善に関わる運動が盛んになっているが、それがそのまま、牧畜民たちの伝統文化に対する意識にも影響していると見ることができる。

3、ハリガント・ガチャのチョロン・オボア

モガイト・ガチャと同じ昴素鎮に所属するハリガント・ガチャには、チョロン・オボアというノトゥク・オボアがある。これは、海拔1,403mの高さの丘の上に位置する13基のオボアである。このチョロン・オボアの元主宰者が、筆者の現地協力者であるバヤン・チョット氏と親戚関係にあったために、筆者もそこに案内してもらうことができた。チョロン・オボアの大オボアは2012年に改築された。オボア祭祀の日は、オールドス暦の9月（旧暦6月）3日で、モガイト・ガチャのイケ・ツァイダム・オボアと同じ日に行われている。⁽⁸⁾

元主宰者のL氏（60代）によると、このチョロン・オボアは、ホラガタイという裕福な家庭の人が建てたオボアであるため、ホラガタイ・オボアともいう。このホラガタイ家とL氏の先祖は近所に住んでいたという。L氏が子供の時に、父親（テムル）と2人の兄弟（チンヘルジャブ、サルライ）の3人の世帯がこのオボアを祭っていた。その後、また2つの親戚が加わり、5人の世帯がチョロン・オボアを祭るようになったという。

文化大革命中にオボ-祭祀は禁止されたのだが、このチョロン・オボ-の祭祀は密かに行われていたという。毎月3日の朝、オボ-に「サン（アルチャなどの線香）を捧げる」儀礼を行い、それが原因で捕まえられたこともあるという。正式に祭祀を行うことが不可能だったために、乳製品などの少量の供物を持参して祭っていたのだという。正式にオボ-祭祀が復活したのは、1978年だったという。L氏は上の世代から受け継ぐ形で1990～2004年までの十数年間、このチョロン・オボ-の主宰職を担当した。従兄はいるが、個人的な理由でL氏以外の親族は皆、この主宰者組織に参加することはなかった。オボ-祭祀については、現在のハルガント寺の首席ラマ僧のサムダクという人に協力してもらい、L氏がサンを捧げる儀礼などを行う時に、サムダク僧を招いて読経儀礼を行っていたという。

L氏によると、このチョロン・オボ-は1978年から正式に復活し、当時、参拝者は叔父たちの数世帯の人たちしかいなかったが、その後、祭祀の規模が徐々に拡大し、競馬や相撲など伝統的なナーダムも行われるようになったという。L氏の記憶では、チョロン・オボ-の場合、政治運動によって禁止される以前も、現在のような規模のオボ-祭祀は行われていなかったという。2004年からL氏も年を取り、子供たちも町で就職したため、主宰職を村の人たちに譲ったという。

L氏が主宰職を担当していた時には、個人の意志により決められていた主宰職の任期は、現在では3年ごとの交替制へと変わったという。2011年以降は、昂素鎮の鎮長と副鎮長のバヤンムンゲとマンダホという2人がこのチョロン・オボ-の主宰職を担当することになり、2012年の時点では、ちょうどオボ-の聖域が改築されているところだった（写真11）。聖域では、セメント作りのゲルを建てて、周りに松の木々を植えている。



写真11 改築中のチョロン・オボ-とL氏（左）

現在、チョロン・オボ-は基本的に30～40戸の世帯によって祭られている。毎年のおボ-祭祀の供物に10頭ぐらいの羊が必要となっているが、近年、この供物は参拝者の世帯ごとに3年に一度必ず提供するように義務付けているという。オボ-祭祀には、ラマ僧を3人ほど読経のために招いている。

4、バヤンシリ・ガチャのチャガン・デゲギン・オボ-

チャガン・デゲギン・オボ-は、昂素鎮のバヤンシリ・ガチャにある海拔1,423mという高い丘に位置する。近年、地方の文化建設プロジェクトにより新しく造られたオボ-は、コンクリート製の土台の上に生木が挿し込まれたものとなっている（写真12）。オボ-の左側には、170cm×170cmの大きさの記念碑があり、そこにオボ-の歴史と伝説が書かれている。

このオボ-の由来については、以下のような伝説が伝わっている。昔はこの土地でゴムボ・ダムサルという裕福な牧畜民が住んでいた。ある日、ゴムボ・ダムサルは現在のチャガン・デゲギン・オボ-が建つ丘に登りタバコを吸いながら家畜を飼っていたが、そこで思いがけず大事な喫煙具のパイプ

をなくしてしまった。何度も何度も探し回ったが見つからなかったため、パイプを落とした辺りに石を積んで印をつけておいた。その後、ゴムボ・ダムサルは丘の上にパイプを探しにくるたびに石を積み上げていった。時間が経ち、積んだ石積みはだんだん大きくなり、落としたパイプも偶然見つかったという。喫煙具のパイプは、モンゴル語で「デゲク」といい、ゴムボ・ダムサルの喫煙パイプはシルバーの色だったため、この丘は後に「チャガン・デゲギン丘」、つまり「白いパイプの丘」と呼ばれるようになった。そして、積み上げてできた石積みは、チャガン・デゲギン・オボーと名付けられた。



写真12 チャガン・デゲギン・オボー

このオボーは、1890年代になって、元マラト蘇木出身のノヤン（王公）が地方の人々に呼びかけて建てたものである。文化大革命後正式に復活したのは1981年のことで、その時のオボーは土盛りを母体にし、その上に灌木の生木を束ねて挿したものであった〔ソナムら 2005：224〕。近年、オボーは再改築され、コンクリート製の母体に生木を挿してできたものとなっている。1990年代以降、チャガン・デゲギン・オボーが位置するバヤンシリ・ガチャの人民委員会は、上層の行政側の支持を求め、チャガン・デゲギン・オボーの参拝者たちに呼びかけて、オボーの周辺に松の苗を植え、環境の緑化の改善に努めてきた。また、オボーに捧げられた布施を集め、オボーの祭祀場に2つのコンクリート製の小屋を建てて、祭祀場の設備を改善したという。⁽¹⁰⁾

チャガン・デゲギン・オボーが最初に建てられた時、オボーの下に家畜の繁殖を願って神聖物を埋めたため、地方の人々はこのオボーに家畜を守る神が宿っているのだと見ている。昔から地方の裕福な3世帯が主宰を担当し、元モガイト・蘇木と元マラト蘇木の人々が、毎年オールドス暦の8月（旧暦5月）23日に羊の丸煮を供えて祭ってきたという〔アルビンバイヤル 2005：287〕。

オボーのそばに建てられた記念碑は、2005年に日本に留学中だったホビスガルト（40代）により建てられたという。ホビスガルト一家は上の世代からこのチャガン・デゲギン・オボーの参拝者であったといい、現在4人の兄弟はいずれもこのチャガン・デゲギン・オボーの主宰者グループの主力を成しているという。ホビスガルトは、家族の四男であり、兄弟4人の中で三男のヘシクバトだけがバヤンシリ・ガチャに住んで牧畜を営み、残りの3人の兄弟は皆オトク地域の旗の所在地に住んでいるという。兄弟4人は近年、チャガン・デゲギン・オボーの再改築に貢献しており、もともと裕福な世帯だったため、オボー祭祀においても主宰職を担っているという〔ナランビリゲ 2010：420-422〕。

オボー祭祀の主宰者組織は、オボー文化の継承を直接担う集団であるため、彼らの組織の特徴を把握することは、オボーが辿ってきた歴史を把握することにつながる。また、オボー祭祀習俗が発展していく道を想定する手がかりになり、オボー民俗の継承に関わる視点においても避けられない課題である。上で取り上げたオボーの主宰者組織の構成の特徴について、以下の3点にまとめることができるだろう。

1) 文化大革命後の復活に当たって、早速オボー祭祀に着手したのは、前の世代からこのオボーを祭ってきたといわれる、この土地に最も早い時期に住み着いた人たちである。モガイト・ガチャのような自然村がオトク地域で形成されたのは、20世紀初頭のことである。この時期においてモガイト・ガチャに住み着いていたモンゴル人たちは、ガチャの原住民であるとされ、身近に位置する村落のオボーにとっては最も長い歴史を持つ参拝者と見なしてよい。文化大革命後になって、村落のオボーはこのような人たちの手によって復活されたのである。

2) 上の事例からわかるように、これらの村落のオボーが復活してから、すでに30数年の時間が経過した。現在のオボー祭祀の主宰者グループには、当時、復活に関わった人たちの次世代に当たる者が多い。伝統的な遊牧社会においては通常、結婚した子供たちは自由に家畜を追って本家から自然に離れて暮らすものだが、20世紀の後半から地元の原住民たちの人口が増加した上に、外来移植民が加わり、人口密度が増大したことにより、牧畜民たちの昔のような自由放牧が制限されることになった。

現在のモガイト・ガチャの牧畜民世帯の分布を見ると、兄弟が何人かいる世帯の場合、兄弟たちは親の牧場の内部や周囲に集中して暮らしていることが多く見られる。したがって、上で挙げたイケ・ツァイダム・オボー、チョロン・オボー、チャガン・デゲギン・オボーのように、オボーの主宰者組織においては兄弟で主力を担うという特徴が見られたり、あるいはフテリン・オボーのようにその土地に長く暮らしてきた原住民の後裔たちがオボー祭祀のおもな主宰役を担うという特徴が見られるのである。

3) 近年、地域の伝統文化の復活に対しては、行政側の注目も集まっており、伝統文化の復興は施政者の協力を得ることによって、その影響力を拡大させていく傾向が見られる。村落のオボーにおいても、その主宰者組織に地方の役人や高い影響力を持つ人たちが直接関わっていることが、ハリガント・オボーとチャガン・デゲギン・オボーの事例からうかがえる。また、イケ・ツァイダム・オボーの主宰者のノルブと、2013年から主宰者の職を受け継ぐことになっている彼の長男のビリゲトは、近年、様々な宗教活動により地方での影響力を拡大しつつある。⁽¹¹⁾

このような主宰者組織に見られる動きからは、これらの村落のオボーが将来的には、牧畜民だけによる宗教活動の場としてではなく、地方で影響力を持つ民族文化を発揚することのできる場所として発展していく可能性を見ることもできる。行政側が注目しているオボーについては、近いうちに舗装道路を整えることも計画されており、交通の便がよいオボーについては、将来的にさらなる観光地化が進む可能性も想定される。

五、おわりに

本稿は、定住型の牧畜生業形態の定着に伴い、牧畜村落におけるオボー祭祀活動に如何なる変化をもたらしてきたかという点の問題を中心に検討してきた。特に、今までの研究においてほとんど取り上げられてこなかった牧畜村落のオボー祭祀活動を担ってきた主宰者組織の形成とその特徴に焦点を置くことにした。定住型の生業形態が定着する以前のオボー祭祀の主宰組織は、同じオボーを祭る人々の間で自由に交替で行われていたが、現在の定住型生業形態の定着により、オボー祭祀の主宰組織に次のいくつかのパターンが見られるようになった。

① 地縁と血縁

牧畜村落の形成に関わった世帯を中心に主宰組織が形成される。さらにその血縁の中で、主宰組織が継承されている。

② 交替制

①のパターンから近年においては、新しい地縁関係の中で交替制によって主宰者が決まるという仕組みが形成される。ある意味では、伝統的な仕組みに近いものといえる。

③ 有力者による主宰組織

①をベースに有力者によって主宰組織が形成されている。一方で、主宰する有力者の影響により、祭祀規模が拡大されていく。

牧畜村落のオボー祭祀において、伝統的な習俗活動に様々な変遷が見られる一方、祭祀儀礼の流れなどが昔のまま継承されている。オボー祭祀儀礼に、モンゴル人が昔から篤い信仰を持つチベット仏教が関わり、供物の浄化儀礼、供物を捧げる儀礼、招福儀礼などの祭祀儀礼の諸過程にラマ僧の読経が付くものであり、それが今日も変わりなく引き継がれている。また、オボー祭祀活動においても、伝統的な競技に競馬以外にモンゴル相撲も行われるようになった。

近年、市場経済の発展により、地方の人々の生活意識も徐々に変化している。牧畜民たちの中では、オボー祭祀の日に臨時商業に従事する人たちも現れ、祭祀場の近くで飲み物やお菓子などの簡単な商品を販売したり、簡単な食事を提供する飲食店を開く現象も見られるようになった。定住型の生業形態の定着と生態環境の保護政策などにより、牧畜民は自由に家畜の放牧ができなくなり、生計維持のために臨時出稼ぎや臨時商売など様々な仕事に従事するようになり、それに伴い時代に応じた意識観念も芽生えてくることが想定される。

今後の課題としては、生態環境の回復が提唱される一方、地方の開発事業が絶えず推進される社会背景下におかれて、内モンゴルの牧畜地域の生業形態と牧畜民の生活様式はどのように変化していくかに注目し、オボー祭祀習俗の伝承を担う地域集団の動態をより深く検討していきたい。

注

- (1) 本稿で取り扱うオトク地域は、オトク旗とオトク前旗という2つの旗からなる地域の範囲を指している。本来、この2つの旗は「オトク旗」という1つの行政単位だったが、1980年に、現在のように2つの旗に分けられた。筆者は近年の調査研究で2つの旗に跨って調査活動を行ったため、本稿では2つの旗を総称してオトク地域として取り扱うことにする。
- (2) オトク地域は南に陝西省と隣接しており、昔から隣接地域から移住してきた農耕民を中心に、現在のオトク前旗の南部の城川県辺りは、基本的に農耕経済区を成している。
- (3) 現在オトク旗の西の棋盤井鎮周辺には、近年、工業経済区が成立し、それがオトク地域の工業や経済の中心となっている。
- (4) オトク地域の豊かな自然環境をもとに観光業を開発する目的から、現在のオトク旗の北に西オールドス自然保護区などが設置されている。
- (5) 畑で作るトウモロコシは春の休牧期における家畜の大切な餌となるため、畑の仕事も牧畜民たちの春から夏にかけての大切な作業の1つとなっている。
- (6) 春の仔畜の生存率を100%保つことは、牧畜民として生きる上で最も大きな誇りとなる。内モンゴルの牧畜地域で4年間暮らした経歴を持つ著名な作家張承志は春の季節と牧畜民について次のように描いてい

- る。「春だけが仔畜を生み育て、しかもその絶対数を増加させることのできる唯一の季節であり、この季節にこそモンゴル牧民たちは、ほとんど芸術的遊牧技能ともいべき仕事を行うのだ」[張 1986:63]
- (7) これらの植物は、家畜にとって最も栄養分の高い植物であり、またオトク地域のような土の柔らかい砂漠性草原にとって、砂丘を抑える機能も持つものである。
- (8) オトク地域にある13オボ-は、大オボ-（将軍オボ-）が1基建てられ、残りの12基の小オボ-（兵軍オボ-）は、北の方向に直線で並べているが、このチョロン・オボ-の場合、12基の小オボ-は東南方向に直線で並んでいる。
- (9) 同じことは、オトク地方の92歳の長老の話にも出てくる。近代以降の戦争や強盗の略奪など不安な社会環境は、軍馬の提供や強制的な税金の支払いなどによりモンゴル地域の貧困化をもたらし、実際、オボ-文化の不振は20世紀の初頭から引き続いてきたことが言及されている[ロブサン・チョイダグ 1981]。
- (10) モガイト・ガチャのバヤン・チョット氏のインタビューによる。
- (11) 主宰者のノルブ氏は、信仰心が篤い仏教徒であり、現在地方のラマ廟のラマ僧になることを希望し、子供の頃にチベット語を勉強した経験があったため、チベット語の経文を勉強している。また民間で「マニ協会」という経文を唱え、心身を清める協会を設立し、数人の生徒を持っている。長男のビリゲト氏は、以前から占いごとを行うなど靈感を持ち、近年占いの分野で地方においてかなり影響を持つ人物になっている。また最近シュルヘイというラマ廟の正式なラマ僧にもなっている。

参考文献

- 風戸真理 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる——』世界思想社
- 高明潔 2004 「「ソム」と「鎮」の間——内モンゴル牧畜業地域における新しい文化の生成——」『中国21』vol.19 風媒社 pp.57-80
- 2008 「牧畜文明におけるソルコ制の位置付け」『改革・変革と中国文化、社会、民族』日本評論社 pp.173-198
- 後藤富男 1956 「モンゴル族に於けるオボの崇拜——その文化における諸機能——」『季刊民族学研究』vol.20 pp.47-71
- 小長谷由紀 2003 「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷——錫林浩特市域の事例から」塚田誠之編 『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』風響社 pp.69-106
- 巴図 2007 「内モンゴル牧畜経営の実態と環境問題」『横浜国際社会科学研究所』vol.12 No.2 pp.27-50
- 白莉莉 2012 「牧畜村落におけるオボ-祭祀の復活及び祭祀儀礼の再考」『年報 非文字資料研究』vol.8 pp.295-311
- 2012 「オボ-民俗の景観的変容——2011年オトク地域における調査事例を中心に——」『比較民俗研究』vol.27 pp.145-161
- 2013 『モンゴル族のオボ-信仰の持続と変遷——内モンゴル・オトク地域の事例研究を中心に——』学位論文 神奈川大学歴史民俗資料学研究科
- ボルジギン・オルトナスト 2005 「モンゴルの遊牧文化におけるオボ-祭祀に関する研究——ウジムチン地域の事例を中心に——」『旅の文化研究所研究報告書』vol.14 pp.75-91
- 2007 『オボ-祭祀——ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究——』博士論文 千葉大学社会文化科学研究科
- ナランビリゲ 2010 『モンゴル族のオボ-祭祀——内モンゴル・オトク前旗の事例にみる民族帰属意識・文化継承・現代化——』博士論文 神奈川大学歴史民俗資料学研究科
- 楊海英 2002 「十九世紀モンゴル史における「回民反乱」——歴史の書き方と「生き方の歴史」のあいだ——」『国立民族学博物館研究報告』vol.26 No.3 pp.473-507
- 2002 「十九世紀末におけるモンゴルと漢族関係の一側面——清代地方史『靖辺県志稿』がえがくモンゴル」人文論集静岡大学人文学部 vol.52 No2 pp.107-133

- 2003 「漢族がまつるモンゴルの聖地——内モンゴルにおける入植漢族の地盤強化策の一側面——」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』風響社 pp.293-341
- 2004 「都市化の過程における民族文化と自然環境の変化」『オアシス地域研究会報』vol.4 No.1 pp.25-37
- 2006 「「ラクダの火をまつる儀礼」から民族誌の政治性をよむ——ネイティブ人類学徒の曖昧な喪失の視点から」『国立民族学博物館研究報告』vol.30 No.4 pp.493-532
- 吉田順一 2006 「近現代内モンゴル東部地域の変容とオボ」アジア地域文化学叢書『アジア地域文化学の構築』雄山閣 pp.255-282